

一寸、私には難しい問題すぎますが、簡単に言えば最低生活の問題なのです。誤解多い言葉で御用心お願いします。究極的には生活と生き方とは別だと私は思います。生活は経済的なもので置き換えることが出来ると思うからです。ところが人生そう長いものでない故なのか理由は良く分かりませんが仕事が生き方を決定していると私は考えています。結論から言えば篠塚先生はやはり哲学者だと思います。哲学者では大学教師でもなければ現在では食って行けない。私の回りには20代の若さで会社を起こした一群の友人がアメリカにもフランスにもいます。成功するのはするが生き延びるといのは一際難しく殆どが全滅です。未だに成功に程遠い、画家として失敗のまま終わる終極場面を年齢的に迎えている私が画家としての職業が安定しそれが故、友好関係は保たれています。別言すれば会社が上手くいっているときエネルギーに満ち溢れています。失敗したときエネルギーを失い私を訪問してくれます。私には大変面白い勉強になります。

ここで篠塚先生のNY紙の末尾にある「他の資料などお送りします。次の宛先にご連絡下さい。」簡単にいえばこれで会社が出来るのではないか。通俗的手段を使えば暫しのあいだは成功するかに思えます。私が思うにすでにお子様も育ち、大体、奥様と二人の生活ではないかと推測します。勿論、奥様の同意が必要というより、より女性の意見そのものが、所謂、奥様の女性的見識が加味されれば面白いことができる基礎はすでに出来上がっているのではないのでしょうか。

1967年だとすれば31年間のエネルギーが大きなマグマとして体積しています。これをさして「もうすでに大スターである篠塚先生」となるのですが、少々の指し違いがあっても30年のマグマの爆発に狂いはないと思います。それに問題が巨大にも関わらず甘い露がなかったことがよかった。奥さまの采配で篠塚先生の哲学を立ち上げてゆく。なるべく本人以外の人びとを動かす。ここまで固まっていれば他人に歯が立つはずはないと私は思います。そして日常生活とは奇妙に逆立ちした奇跡の待望とでも呼んだらいいものなのか他人が羨やましがる。面白がる。俺にもやらせよ。という形而下の道程を経るよう見えます。とくに私の狭い特殊な経験からしか見ていませんから教訓にはなりません。しかし、小銭を得るにしてもそれ以上の期待を抱かせるものが篠塚先生にはそれに値するだけのエネルギーを私は感じます。

私は断るまでもなく大言壮語型の人間です。しかし私はほぼ確実に大した人間でも大した画家でもないことをよく承知しています。劣等生であり、3、4流であるからこそ、ぶしつけに世界を狙うのです。天才、素質のある方はそんな馬鹿げた法螺すら考えつかないでしょう。だからこんな馬鹿が必要なのだ。と自己礼讃しています。古い友人が時々のおつてくれるから始末が悪い。そして見当外れのお便りを篠塚先生夫妻に差し上げてしまいまし

た。しかし「ヤスーン」には他人を興奮させるものがあります。その興奮した他人にキャッチフレーズを作らせる。喉に言葉がつかえて最後の決め玉がでてこない。

「ずーっと貧乏であったのと、ヤスーンの問題を抱えていたためいつも追いかけられるような気がしていて、気持ちの余裕がなかったからでもあります。」

と、殆ど篠塚先生が言った言葉が決め玉になります。女性は主婦は本能的に亭主を自分に惚れさせたい。それも十分能力ある男である亭主に。この言葉は普遍的に解釈すれば不可能なことなのですが「ヤスーン」と違い、たった一人の女房が「うちの亭主は確実にわたしに惚れている」と確信すればいいことです。「ヤスーン」には学問的証明がいるかに見えます。それが証明されたとき大発見者篠塚先生の名が確立します。しかしこれは、いや、これもと呼ぶべきかなのか。発見者篠塚先生の名声は一つの名から他の名前に拡大することはありません。固有名詞だからです。女房の確信は一人であります但有史いらい女性の切なる願望である普遍、自由、愛の渴望。人間の根底を問うものに見えます。

女房が主体的に関わるとき「ヤスーン」は大樹となって予想もしなかったもう一つの世界に根をはることになり「ヤスーン」は科学から哲学へと強化される。これは篠塚先生本来の祈哲学へと帰還してゆく壮大なロマンの道すがらではないのか。

このことをもう一人の篠塚先生が、別言すれば奥様が確信すればボランティアはすぐ動きだすかに見えます。篠塚先生本人が動いたのでは現在の生業があるかぎり大変だと思います。ただ単に外国にいるというだけで不運にもなり幸運にも変化します。とくに現代は女性の目で見ることが必要なかもしれないと順子先生と大論争して何時も噛み締めさせられています。そういえば女房がレターという個人誌を2冊だしています。年1回です。今年も出すものと思います。10月初めフランスに戻るとき「パラダイスへの道」と同時に送ります。薄い小雑誌で現在は女性だけのようです。全く私とは関係ないものです。私と女房の関係は「戦い」の相手という認識です。まず絵ですが仲良、私が教える。私の友人は皆そう信じています。これも表面的にはそう見えることはいたし方ないけれども実際同じ絵を描く必要はないわけで個性とは非常識、エゴイズムの方に近いのが実体でその時は大喧嘩で不愉快ですがやはり区分、区切りを着けておかないと独立した仕事できません。年齢は8歳開いていますが手強い相手なのです。女房に言わせれば手強くならなければ貴方みたいなざる賢い奴とは一緒に住めないとなります。まあ、色々ありますが私たち同士は結構、必要だし仲は理想的だと考えています。まあ、同じ商売ですからいかに特色をだすか大変なところがあります。私達は同じ同業者ですが競争相手の独立した者です。でもお互い別々に独立採算で思う存分やれます。その意味において理解しあえる奇妙な仲間です。この歳になって思い知らされること。それは自分の経験から出れないということ

す。先の便りを読み返すと大体同じことばかり書いています。そういう意味からすればこのお便りは篠塚先生にあてた現在の私の最新作ということになります。桜井という画家が描いた「ヤスーン」のスケッチなのですね。篠塚先生夫妻にあてた「パラダイスへの道」へのお誘いなのかHGもしれません。勿論、ただのお便りなのですが、もし、稿戴けるのであれば大変嬉しい事です。またまた下らないことを書いてしまいました。桜井孝身